

自らの力で思いや考えを表現できる国語教室～「わかる」「できる」楽しさを感じながら～

指定校 1 年次 安曇野市立豊科南中学校 藤村 滉

（１）本年度の N I E 活動の概要

本年度、本校が掲げた研究テーマは『「学びたくなる」「学ぶことの楽しさを味わえる」授業づくり～対話的で深い学びを求めて～』である。研究グループおよび国語科では、「対話的で深い学び」に目を向けて授業を行った。授業の概要としては、相手意識と課題意識をもちながら適切な言葉を選び、表現の工夫ができるような言語活動を多く取り入れた。

実践を通して、相手意識をもって自分の思いを伝えたり、取り組んだ過程にも目を向けながら自己の学びの良さを受容したりするなど、多くの場面で自他と「対話」する生徒の姿が見られるようになった。これらの姿から自分の思いを表現することの楽しさを感じることにつながり、「わかった」「できた」という実感をもつ生徒が増えてきたと感じている。

一方で、「自らの力で」という面については課題として残っている。教師の理想に近づけるための指導を所々でしてきた自分を振り返り、生徒自らが問いを立てながらより主体的に活動できるよう、学習問題などを生徒たちと考えていくことが大切だと感じた。

（２）本年度の N I E 活動をはじめる前の状況

本校の生徒は当初から、話し合いやグループ活動で意見を出す場面や、手紙や文章を書くなどの言語活動において、積極的かつ意欲的に取り組むことができた。また、初めて出会った教材について強く関心をもち、初読で要点を捉えようとしたり、登場人物の心情を追究したりすることもできた。

その一方で、自分の考えていることや思っていることはあるが、どう伝えてよいのかわからず、思っていることを稚拙な表現で伝えたり、相手意識を十分にもてずに伝えたりする姿も見られた。高い理解力や読解力をもち合わせているが、表現力に課題があると捉え、その向上を目指したいと考えた。

また、他者から受ける評価を気にして自分の思いを伝えることを躊躇してしまう場面が多くあった。そのため、日々の活動の中で何がよかったのか、どうしてよかったのかということ自分で分析できず、自己受容ができないなど、自己肯定感の低さを感じることもあったので、その点についても改善を目指したいと考えた。

（３）N I E 活動の狙い（育てたい力）

本研究では、「対話的で深い学び」について、対話の対象を次のように捉えた。

- ①「友との対話」：自分の考えを伝えるとともに、自分の考えとは異なる他者の考えをきちんと受け止め、受け容れること。
- ②「自分との対話」：自ら生み出した問いに向き合い、粘り強く答えを見いだそうとすること。
- ③「筆者（材）との対話」：叙述に基づいて根拠をもつことで、自ら説明文における筆者の妥当性を考えたり、物語文での筆者の意図を推測し、伏線の考察をしたりすること。

生徒には上記の「対話」を中心に言葉による見方・考え方を働かせてほしいと考えた。

また、（２）で述べた生徒の実態をふまえ、研究グループでの話し合いから N I E 活動を通し

て次の2点を身につけたいと考えた。

一つ目は、人との比較や文章の長短で優劣を判断するのではなく、相手や場面によって、言葉と表現を使い分けるといった「読み手意識」をもちながら自分の思いを伝える力である。

二つ目は、仕上がったものを見合ったときに他者からの評価だけで一喜一憂するのではなく、書き上げるまでに辿った過程に目を向け、自己の学びの良さを受容できる力である。

（４）公開授業以外のN I Eの取り組みの状況

①【N I E新聞閲覧コーナーの設置】：記事の内容や表現にふれる・活字への関心を高める

昇降口に毎日の朝刊を置く場所を確保し、全6社の記事が置ける新聞閲覧コーナーを設置した。新聞の横に付箋と鉛筆を置いておき、生徒が感想を書いたり意見交換をしたりできるようにしたところ、立ち止まって新聞を読む生徒が多くなった。他の先生方にも協力していただき、コメントを書いてもらうなどの工夫をしたことで新聞に親しむ場所となり、新聞に興味を示す生徒が増えた。

②【授業内での活用】：書くことへの慣れ・相手意識をもった表現の習得

3年生の『握手』の単元で、「ルロイ先生追悼新聞」の作成に取り組んだ。各社で発行される新聞を参考にしながら書き方を学ぶ生徒が多かった。また、新聞を書く上で、ルロイ先生の人柄を主人公の立場に立って読み取ることをねがい、「天国のルロイ先生へ」という記事を必ず入れるよう伝えた。「新聞を書く」ということ自体に難易度の高さを感じながらも、ルロイ先生がどのような人なのかということについて、生徒は知らない人にも読みやすい新聞を心掛けた記述をしていた。



③【信濃毎日新聞社の方による出前授業】：新聞の書き方から言葉選び、表現の豊かさを学ぶ

対象クラスである3年3組で、信濃毎日新聞社のN I Eアドバイザーの方に出前授業を行っていただいた。新聞の書き方を中心に、新聞がどのようにつくられているかなどをご教授いただいた。真剣な眼差しで新聞記事を見つめる生徒たちは、今までよりもさらに書くことへの興味をもつことができたと感じる。

リード文や事実をもとに記事を書く体験をしたことで、「自分も新聞記者のように誰にでも伝わりやすく読みやすい文章を書きたい」とねがう生徒の姿を授業の振り返り場面で見ることができた。今回の単元に前向きにむかえるようなきっかけづくりとなった。



（５）公開授業などの活動内容

I 授業学級と単元名 3年3組『語彙を豊かに』

II 単元ゴール 「文章を通して自分の考えを他者に伝えるためにはどんな表現の工夫がで

きるかを単元の学びから自分なりに考えられる」

Ⅲ 主眼（ねらい）

どんな表現の工夫をすれば、伝えたいことを読み手によりわかりやすく伝えられるかを考える場面で、慣用句・ことわざ・四字熟語を使って書いたコラムのよりよくなる点を伝え合う活動を通して、表現の効果に気づき、目的や意図に応じた表現になっているかなどを確かめながら、読み手にわかりやすく伝わりやすい表現に工夫できる。

Ⅳ 単元展開（全 9 時間）

【主な学習活動と評価計画】		☆…「評価に用いる評価」			♡…「学習改善につなげる評価」
時	○学習活動	評価の観点			評価方法
		知	思	態	
1・2	○教科書（光村 3）の「人工知能」をテーマにした 2 作品を読み、単元の学習問題を設定する。				☆二つの作品を比較し、書き方や考え方の違いと、主張と根拠の適切さを考えられているか記述から評価する。
	単元の学習問題：文章を通して自分の考えを他者に伝えるためにはどんな言葉が必要なのだろう？				
	○ニュース・新聞・情報番組などを見て、文章と比較し、それぞれのよい点や違いをまとめる。				☆文章とその他の媒体で情報の伝え方を比較し、書き方や考え方、伝え方の違いに気づいているか、主張と根拠の適切さについてどう考えているかを記述から評価する。
3・4・5	○慣用句・ことわざ・四字熟語について学習し、たくさんの言葉に触れ、その利点や欠点を考える。				☆慣用句などを辞書やクロムブックで調べ、それらを使うことのよさを自分で見つけようとしているか記述から評価する。
	最終的に、慣用句などを使ってコラムを書き、読み手意識を明確にするため、まとめたものを全校や先生方に見てもらうことを目的とすることを伝える。				
	○自分が伝えたい情報は何か、コラムの中で使えそうな慣用句・ことわざ・四字熟語は何かを調べる。（4・5）			☆	☆自分が伝えたいことを、本やインターネットなどで粘り強く調べられているか、根拠のある情報を集められているか活動に向かう姿勢とまとめ方から評価する。（4・5）
6・7・8（本時）	○自分が調べている情報との関連情報を新聞から集めて、スクラップ新聞を作り、簡単な意見を述べた文章を書く。新聞記事では、どのように慣用句・ことわざ・四字熟語が使われているか特徴を見つける。	☆		☆	☆情報を分類したり、選定したりする中で、読み手意識を持ち、比較検討しながら目的に応じた文章を書こうとしているか記述から評価する。（6・7）
	○集めた情報などをもとに、伝えたい情報を精選し、慣用句を使いながらコラムを書く。さらに、よい文章とはどんなものなのか目的を全員で確認する。 ○前時に書いたコラムを互いに読み合い、前時で学んだ観点から相手のよい点ともっとよくなる点を見つけ伝え合い、仲間の意見を参考にコラムを再度工夫する。（本時）		☆	☆	☆読み手が、前時に学んだ観点からよい点と もっとよくなる点を伝え、書き手は、読み手からの助言を自分で受け容れようとしているか、その助言を基に、さらに相手意識のある文章を書こうとしているか学習に向かう姿勢と学習シートから評価する。
9	○前時までの内容から、コラムを完成させる。さらに読み合い、文章を書くときと話すときでの違いや工夫を考える。	☆	☆		☆単元全体を通して作り上げたコラムについて、自分が調べたり工夫したりした成果を交えて発表することができているか発表の様子と振り返りから評価する。

V 本時の授業構想（使用教具：「ワークシート」「新聞」、ICT：電子黒板、クロムブック）

ア) 本時の学習問題と、観点を生徒と確認する。

【学習問題（問い）】どんな表現の工夫をすれば、伝えたいことを読み手によりわかりやすく伝えられるだろうか

【学習課題】慣用句・ことわざ・四字熟語を使って書いたコラムのよりよくなる点を伝え合おう。

イ) グループに分かれて仲間の表現のよい点ともっとよくなる点を見つけ伝え合う。

ウ) 仲間からもらった助言を基に、慣用句の使い方や言葉の使い方を見直し、もう一度コラムを工夫する。

※新聞のコラムから慣用句が使われているものや、生徒が書いたものを全員で見合いながら、以下の観点を基にして、「よい点・よさ」について本時にまでに生徒たちと共有しておく。

【観点】（本時扱うものは、①～③とし追究の視点を絞る）

①書いている題材の選定の視点や発想 ②興味を引くタイトルや文章か

③慣用句を用いたことで表現は豊かになっているか ④集めた情報の信頼性

⑤主張と根拠の関係性が適切か ⑥論理の展開に違和感がないか

VI 材の価値と本時に寄せる教師の願い

i 材の価値

「人工知能との未来」「人間と人工知能と創造性」（光村3）は、どちらも人間と人工知能がどのように共生していくかということをテーマに、筆者が自分の立場から社会を見つめ、これからの時代を想定して書かれているものである。この教材から、社会に目を向けて自分事と捉え、主体的に学ぶ姿勢が期待できる。

読むことの活動として、次のことを生徒たちと探究することができる教材だと考える。①筆者の意見（主張）と根拠の関係性が適切なのかということ。②そもそも、その根拠となる情報の信頼性を考えること。③作品が一つではなく二つ用意されており比較読みを通して、意見の述べ方や考え方の違いを読み解くこと。他にも挙げられるが、これらの視点を大切に生徒と探究したい。

文章を書く際に、慣用句やことわざ、四字熟語などを使うことで、その情景を想像しやすくなり、ある出来事について他者に印象強く伝えたり、臨場感を与えたりすることができる。また、伝えたいことを話したり書いたりするときに、ダラダラと長く説明するのではなく端的に伝える効果もある。

一方で、説明を省き簡単にしてしまうことで相手に伝えたかったことが伝わらないことや、そもそも日常では使う場面が生まれにくいような慣用句なども存在する中で、言葉選びや場面選びの力もつけることができる。このように、慣用句などの適切な使い方を考えることで、意味を知っているだけの「理解語彙」も増やしながらか、日常生活の中で使うことのできる「使用語彙」へと変化させることができると考える。

コラムを書く目的には、興味関心をもった身近な出来事について、単純に自分の感想を述べるだけでなく事実を基に批評も加えながらか書くことができるからである。語彙を増やしていく中で、調べた情報をもとにして、自分が相手に伝えるための文章としてふさわしい言葉は何かと選びながらか探究することで、文と文のつながりや読み手意識のある文章を表現することができる。と考える。

ii 教師の願い

生徒たちは、文章を書くことに慣れてきており、ワークシートへのまとめや振り返りの記述はもちろん、手紙や新聞を書く活動においても叙述を基にしながら登場人物の心情に寄り添いながら内容を充実させて書くことができるようになってきている。

文章を書くことへの抵抗感は減ってきているが、自分が書き上げた作品などに自信を持てていない発言が目立つ。この原因として、よい点が沢山ある中で、ありのままの自分のよさに気づけていないのではないかとということと、最後にできた作品にしか目が向かず、その過程に注目できていないのではないかと考えた。そこで、本単位では、友と「よさ」と、「さらによくなる点」を語り合う活動を設定した。その意図としては、他者からの評価だけだと表面上の自信になってしまい、その表面上の自信が何かしらの原因で崩れてしまうことがあったときに、「自分はダメだ」ということにつながるのではないかと思うからである。もらった助言をきちんと自己受容し、改善につなげることにより、「文章を書く」という行為を通して、よい点もそうでない点も含めたありのままの自分を受け容れることにつなげていきたいと考えている。

(6) 1年間取り組んだ成果と課題

i 研究授業での生徒の姿から

研究授業では、互いの未完成のコラムをもっとよくしたいという思いから、観点に基づいてコメントする姿が見られた。グループ活動では、互いのよさを認め合う声掛けも多かった中で、もっと相手のコラムをよくしてあげたいという思いが高まり、次のようなことをテーマに話し合う姿も見られた。

A「四字熟語を使おうとしすぎて四字熟語のためのコラムになっていると思う。」

B「自分もそんな気がする。カッコいい言葉を使えばいいというわけではないね。」

A「もし、この言葉を使いたいなら、前後の文章も変える必要がある気がする。」

B「四字熟語は伝えるための手段のひとつだから、伝わらなかったら意味がないよね。」

この後アドバイスをもらったB生は、『危急存亡』という言葉で『安心して過ごせるような場所なんてどこにもない』という表現に変えていた。

また、C生はバンクシーについてのコラムに「事実以外にもう少し、自分の意見を述べたほうがいい」と



というアドバイスをもらったことで、『息をのむほど美しい』と慣用句を付け足した。これらの対話は、教師の意図するものである。

また、改善点を伝え合ったことは、相手意識をもちながらという追究の視点にもつながり自分の思いを表現するための文章を書くことにつながっていた。また、指摘し合うことで相手のコラムだけでなく自分のコラムにも再び目を向けるきっかけになった。

互いの思いを伝えあったことで、自分だけでは気づけなかった自らのよさや修正の方向に気

づけることにつながり、自信がなかった生徒たちも、自己受容をくり返しながら自信をつけていく様子を見ることができた。

生徒の姿から見た授業の改善点は、「どんな観点」に対して「どのように」話し合えばよかったのかということをもっと具体的に提示すべきだったという点である。生徒からは「コラムっぽい文章」という発言が多く聞かれたが、生徒それぞれが捉えた「コラムっぽさ」のイメージを共有し言語化することが、生徒自身の思考を深めることにもつながるのではないかと考える。生徒たちの追究が深まるということは、助言をする側にとっても学ぶきっかけになり、もっと「対話」をする楽しさを感じられるのではないだろうか。

ii 単元末での生徒の姿から

本単元では、コラムのテーマとして「自由とは何か」「恐怖とは何か」「安心とは何か」など、捉え方が人によって変わる抽象的なものを計8つ用意した。意見が分かれそうなテーマを用いながら自分の思いを伝えるという活動を行ったことは、生徒自身にとって考える価値のあるものとなり、学ぶ楽し



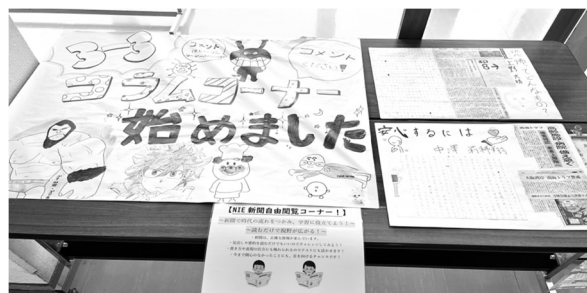
さを実感しながら学習を進めることにつながったと考える。このことは、生徒たちが取り組みの中で、「もっと文章を書きたいが長くなって読みにくい」という発言の後、何度も文章を読み返しながら粘り強く執筆している姿から捉えることができる。その後、発言をした生徒は友のもとへ自ら相談に行きアドバイスをもらいながら試行錯誤していた。主体的に取り組んでいる姿は、アドバイスをする側が「どこを変えるとよりよくなるのか」という問いをもつことにもつながっていた。教師に答えを求めるのではなく、なんとかして自分で見つけたいという意欲は、タイトルにもつながるような、「対話的で深い学び」になったと考える。

単元の終わりに完成したコラムをもとにして、ポスターセッション形式で発表を行った。コラムを書く際に意識した「伝えたいことを伝えるための表現の工夫」などを活かしながら、自分の思いを真剣に語る姿があった。ポスターセッションをする中で印象的だったのは、前時までに友にしたアドバイスが、友の発表においてどのように活かされているかを確認する生徒が多かったことである。自分の思いを通して書いたコラムだけではなく、過程にも注目するように学習を進めたことが効果として表れたと思われるので、活動を続けていけばさらに表現が豊かなコラムになると感じた。

iii おわりに

作成したコラムは、他学級や先生方からもコメントをもらえるように校内3カ所に展示した。

展示により、授業学級以外の生徒も表現の仕方や内容について興味を示すようになった。この活動を通して、全校の生徒にも「書くこと」は、楽しいことだという思いに少しだけつなげることができたと考える。



今後さらに文章における表現の豊かさと面白さを感じていけるよう私自身努力していきたい。